



廣瀬川

第95号

平成31年
1月31日

仙台市小学校長会

発行者／吉田 秀夫（会長） 責任者／花淵 浩司（広報部長）

主張

今 思うこと



副会長 熊本 清孝（通町小学校）

昨年の夏は、連日猛暑に見舞われた。しかも、生命に危険を及ぼすと言われるほどの暑さであった。

熱中症予防のために、夏休み中のプール開放を一部中止したり、時間短縮したりして対応したが、これまでにこのような対応をした経験は記憶にない。暑さに限らず、全国的に豪雨や台風による大規模な風水害等に見舞われた年でもあった。

異常とも思える極端な気象は、ここ数年常態化してきているように感じられ、もはや異常気象ではなくなくなってきているように思われる。地球温暖化などの地球環境の変化とも受け取れる。

翻って、子供たちの現状を見ると、気象の変化同様に、取り巻く社会や家庭環境の著しい変化は、子供たちの心身の発達や成長に予想以上の影響を及ぼしているように見える。

例えばゲームの世界は、驚くスピードで進化し、ちょっと昔の映画に登場していた「近未来の世界」を超える勢いがある。最近では、実体を伴わない仮想的・疑似的な空間を舞台としたゲームが人気とのこと。ネット上で対抗型・対戦型ゲーム等による激しく強い刺激体験を、長時間、しかも連日に渡って継続している例もあり、子供たちの心や体の健康に及ぼす影響が懸念される。

すでに、ネットやゲームへの依存による影響は周知のとおりである。結果、昼夜逆転の生活から、睡

眠不足や睡眠障害、食欲不振、体調不良、学業不振、登校しぶりや不登校へ。時には、暴力的な言動も見られるなど、この状態から元の生活に戻すことは容易なことではない。さらに、発達障害もあるケースとなれば、担任一人では指導困難な状況となることは十分に予想される。学校での組織的な対応はもちろぬ、医療や相談機関等との連携が必要になってくる。

さらに、平成30年10月1日、教育局学校教育部特別支援教育課から、仙台市立幼稚園・小学校・中学校・高等学校を対象とした「平成30年度発達障害の幼児児童生徒への教育支援に係る調査結果」が届いた。資料によると、「通常の学級で配慮が必要な幼児児童生徒数」は過去最多の4,073人であった。

実際のところ学校現場では年々、発達障害に限らず、前述のゲーム依存や被虐待等々による配慮を要するケースが増加し、最近の極端な気象同様、もはや特別なことではなくなってきた。問題は、配慮内容が多岐にわたり、これまでの指導方法では通用しないケースもあるなど、通常の学級に在籍する配慮を要する子供たちの指導は、その指導の困難さが際立ってきたことである。

今後、各学校においても、個別指導室の確保及び指導者の配置が望まれる。また、支援に携わる教員に限らず、管理職も含めた全教員で、配慮を要する子供たちの指導に関する研修と研究を実施したい。

内 容

○主 張	1
○特 集	2
○座 談	3
○提 言	16

○学区紹介	18
○研究部から	19
○生徒指導部から	21
○新任校長所感	22
○編集後記	24

特集

道徳教育を学校運営の一つの柱に

須藤 洋 (松森小学校)

「特別の教科 道徳」が始まる

今年度の4月から小学校では教科書を使った「特別の教科 道徳」が始まりました。仙台市では、「仙台市教育振興基本計画」の基本的方向として「豊かな心の育成」を掲げ、「杜の都の学校教育」の重点事項「豊かな心の育成」においては、「命を大切にする心や思いやりの心、規範意識の育成」等が示され、道徳教育の更なる充実が求められています。

ですから各学校では道徳教育を学校教育の推進の一つの柱として位置付け、取り組んでいくことがますます大切になってきています。

重要なのは校長のリーダーシップ

さて、道徳教育は児童生徒の道徳性を養うことを目的に、全教育活動を通じて行われるものです。各学校では、校長の明確な方針の下に、道徳教育推進教師が中心となって、道徳教育全体計画、道徳教育全体計画別業、道徳科年間指導計画が作成されています。

小学校低学年の内容項目数は19、中学年は20、高学年は22となっており、35時間の中で全内容項目を扱います。残った時間については「補う」「深める」「つなぐ」視点で内容項目を選び、年間35時間の計画を立てることになります。

各学校によって児童の実態が違うので、児童の実態を押さえた上で、児童に足りないものはどこなのかを明らかにしていくこと、そして学校として、どんな内容項目を重点的に扱ったらよいかを考えて、道徳教育の重点目標を設定することが特に大切です。

本校の今年度の協働型学校評価における到達目標は、「節度ある規則正しい生活を送る児童の育成」、重点目標は「テレビを見たりゲームをしたりする時間にけじめをつけられる『松森っ子』の育成」です。

道徳教育の重点目標は、協働型学校目標と関連付け、内容項目の中から「節度・節制」を選んで設定し、年間を通して意図的・計画的に指導するようにしています。

児童の実態把握がとても重要

文部科学省初等中等局教育課程調査官の浅見哲也

氏は、「深い学びに児童を導くのは教師である。教師が児童に何を考えさせるのか、明確な意図をもって授業をコーディネートしないと深い学びにたどりつくのは困難である。目の前にいる児童にはねらいとする道徳的価値に対してどのような課題があるのか、そのためにはどんなことを考えさせればいいのか、児童の実態把握がとても重要である。」と述べています。(道徳教育2018年8月号)

私は本校勤務3年目となりますが、本校の児童の実態として粘り強く取り組むことが苦手な児童が多いことから、2年目から朝会等で「学校はなりたい自分に向かって仲間と共に努力し続けるところである」と言い続けています。そして「続ける」(内容項目の「希望と勇気・努力と強い意志」)というテーマで7～8分程度の講話を繰り返し行っています。2学期の始業式では、「超一流になるには1万時間かかる」という話を野球の大谷翔平選手、将棋の藤井聡太7段、テニスの大坂なおみ選手の努力の具体例を挙げて話しました。

「豊かな心」は三輪車のハンドル

以前、ある先輩から「豊かな心」と「確かな学力」と「健やかな体」は学校教育の三輪車の車輪のようなもので、「豊かな心」はハンドルの部分にあたるという話を聞いたことがあります。

私はこれからも本校でどんな心を持った児童を育てたいのかをしっかりと教職員と共に吟味して、道徳教育の重点目標を決め、児童の道徳性を養うために、道徳科の授業を要として全教育活動を通じて道徳教育を行っていきたいと考えています。

校長に求められているカリキュラムマネジメント力

校長には、協働型学校目標と関連付けて保護者や地域と連携して道徳教育を推進していく等、より効果的に、より効率的に心の教育を推進していくためのカリキュラムマネジメント力が求められています。

これからも自分の学校の取組の良さ、特色を生かしながら、児童がよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うための道徳教育の充実に仲間と共に取り組んでいきたいと思ひます。

座談会

震災の教訓を風化させないための取組

●とき 平成30年10月9日(火)

●ところ 仙台市教育センター

【挨拶】吉田会長 震災から7年が経過しました。今年度の入学児童は、全員、震災後に生まれた子供たちです。高学年の子供たちも、震災時は小学校入学前であり、記憶として残っていたとしても、それは断片的なものしかありません。



今日は、「震災の教訓を風化させないための取組について」をテーマに、これから座談会を行います。現在の仙台の子供たちの実態に即した内容ではないかと思っています。

また、昨今の日本列島を襲う自然災害を目の当たりにし、地震に限らず、様々な災害への対応を想定した防災教育が本当に必要だと強く感じているところです。

さて、本日、この座談会のために、お出でいただきました教育指導課長岩田様、教職員課管理主事新妻様、そして校長会事務局長川村様、本当にありがとうございます。岩田課長には、仙台市の防災教育を推進する立場から、「仙台版防災教育」の目指している方向性等について、お話を伺えるものと思っております。また、新妻管理主事からは、阪神・淡路大震災で被災し、その後、先進的な防災教育を進められた神戸市で勤務された経験から、仙台市の防災教育に生かせる神戸の知見を教えていただけるものと思っております。さらに、川村先生からは、津波被害を受けた荒浜小学校の校長として、震災当時の緊迫した状況での校長としての思いや判断、行動についての貴重なお話を伺えるものと思っております。それから、会員の校長先生方からも貴重な体験や自校での取組の状況についてお話をいただく予定にしております。

限られた時間ではありますが、活発な御議論をいただき、実り多い座談会となることを祈念いたしまして、開会の挨拶といたします。どうぞよろしくお願いたします。

近澤広報副部長 東日本大震災から7年7か月を迎えようとしています。仙台市内の学校は、神戸をはじめ全国各地、世界各国から御支援をいただきながら、復興に向けて取り組んでまいりました。

本日御参会の川村先生は、発災当時、仙台市立荒浜小学校の校長職に就いておられ、震災当時の貴重な映像を御提供いただきましたので、会の始めに拝見し、当時のことを想起したいと思います。

まずここで川村先生から、このビデオと先生の思いについて御紹介をお願いしたいと思います。

川村事務局長 本日は座談会に声を掛けていただきましてありがとうございます。これからビデオを観ていただきます。あれから7年が経過しましたが、当時、震災を体験した場所も、状況もそれぞれまちまちです。このビデオを観て、その当時の様子を皆さんと共有したいと思います。

このビデオは震目駐屯地の広報部で制作されたものです。当時の様子を全国の自衛隊の仲間に伝えるということを目的としていますが、津波襲来時の荒浜や市東部の様子が分かるビデオです。名取川を逆流する津波の様子や、ヘリコプター操縦士の思わず叫ぶ声、荒浜の惨状、そして取り残される荒浜小校舎などを御覧いただければと思います。

< 5分間のビデオ視聴 >

近澤広報副部長 震災後、津波被災の荒浜小、中野小、東六郷小が統合や閉校となりました。一方で、2016年2月には地下鉄東西線の荒井駅舎内に「せんだい3.11メモリアル交流館」が整備され、また、荒浜小学校の校舎は2017年5月より震災遺構「荒浜小学校」として公開され、震災の記憶と経験を媒介にコミュニケーションを通じて知恵と教訓を紡ぎ出し、未来へ、世界へとつないでいく取組が動き出しました。



本日は、本市における震災後の防災教育の取組を振り返るとともに、ますます想定が難しくなってきた様々な自然災害に対して、震災を経験した仙台市の学校が行っていく防災教育はどうあるべきかを考える一助とするために、「震災の教訓を風化させないための取組について」というテーマで話し合いを進めてまいります。

<出席者>

岩田光世

(仙台市教育委員会
学校教育指導課長)

新妻英敏

(仙台市教育委員会
教職員課管理主事)

川村孝男

(元 仙台市立荒浜小学校長
仙台市小学校長会事務局長)

吉田秀夫

(仙台市小学校長会長
仙台市立片平丁小学校長)

仲野繁俊

(仙台市立連坊小路小学校長)

中辻正樹

(仙台市立高砂小学校長)

近澤裕子

(仙台市小学校長会広報部副部長
仙台市立西多賀小学校長)

司会
菅澤和広

(仙台市小学校長会広報部
仙台市立折立小学校長)

皆様、それぞれのお立場からの御意見をどうぞよろしくお願いたします。

本市が目指す「仙台版防災教育」

司会(菅澤) はじめに、仙台市教育委員会 岩田光世教育指導課長様にお話をいただきます。第2期仙台市教育振興基本計画に示された施策をはじめ、杜の都の学校教育に示された重点事項を含め、本市が今後目指す防災教育の方向について現状や課題を踏まえ、御教示いただきたいと思います。

岩田課長 まずは、今日、このような場で、震災に関わった先生方のお話を伺えることに感謝申し上げます。よろしくお願いたします。



お話のように、仙台版防災教育は「第2期 仙台市教育振興基本計画」に学校教育のミッションの柱の一つとして位置付けられ、「杜の都の学校教育」にも、重点事項の一つとされていることは、御案内の通りです。教育振興基本計画では、地域の特性に応じた指導計画の確立と、語り継ぐことの二つがうたわれています。当初は仙台市全体で、モデルに沿ってどの学校もおおむね同様の防災教育指導計画が立てられたかと思いますが、震災発災後、地元で起こった災害への教訓はもとより、全国で様々な災害が起きていることを受け、地域によってその災害の様相は多様であることが特に、意識され始めたのではないのでしょうか。それぞれの学校で、自然環境や社会環境の相違から、想定される災害は異なってきます。実態に応じ1次的に、命を守るためにどうしたらよいかについて、指導計画の自校化がとりわけ必要になってくると考えています。

本日、中辻校長先生もお見えですが、平成25年から28年度の4か年にわたりまして、七郷小学校は先駆的な研究開発としての研究成果があります。この内容は「仙台版防災教育実践ガイド」にも反映させていますが、身に付けさせたい資質・能力、これを的確に押さえてカリキュラム・マネジメントがなされ

ています。また、カリキュラムを作成するに当たって留意したいこととして、例えば、震災前、平成21年度における学校と地域の合同防災訓練を行っていた学校の割合は小中合わせて43.1%だったのに対し、今年度、30年度ではその割合は78.1%と、多くの学校で、地域と連携した防災への取組の意識の向上が見られるとともに、その実践が増加していることは大変意義深いと考えます。反面、27年度から開始した防災教育に係る研究推進取組発表校の発表では、行事に関する発表が多く、日常の教科や領域等の授業での、地に足の着いた地道な実践、教科横断的なカリキュラムマネジメントの必要性を強く感じています。打ち上げ花火ではなく、着実な実践の積み重ねと、それを「継続していく」「根付かせる」という責務が我々にはあると、改めてそう思います。

そのためには、震災を経験した者として、我々教員一人一人が、今、目の前の子供たちの、そして、今にとどまらず、彼ら彼女らの将来にわたって、教育という窓を通して命を預かっているんだという、責務、自負が必要なのだと感じています。我々がいかに自分ごととして捉えることができるか、また、時間が移ろうが故に、子供たちにいかに自分ごととしての意識を培えるかが鍵ではないかと考えます。

司会(菅澤) ここでさらに、震災後に神戸に赴かれた教職員課 新妻管理主事からお話を伺います。仙台版防災教育の立案に当たり、後ろ盾とさせていただいた神戸市における防災教育の取組、そして神戸から得た知見について、御教示いただきたいと思います。

新妻管理主事 神戸での1年間のことを簡単に紹介します。平成25年4月から平成26年3月まで、神戸市教育委員会事務局指導部指導課指導係の指導主事として勤務しました。在任中は全国学力・学習状況調査に関する業務や神戸市の防災担当の教員の研修、初任者研修や養護教諭研修等で東日本大震災のこともお話ししました。また、各小学校や中学校に赴いて児童生徒にその時の様子をお話しさせていただきました。さらには、仙台市と神戸市の学校が交流する際の連絡調整をしていました。そういった仕

事を通して、いろいろな小中学校を訪問させていただき、阪神・淡路大震災当時の様子を校長先生や教頭先生方、あるいは地域・PTAの方々に伺ったというのが1年の取組でした。

神戸市の取組について、1年間過ごした中で感じたことや実際どうだったのか、紹介したいと思います。私が着任する前年に、神戸市教委は「新たな神戸の防災教育検討委員会」において、神戸市の防災教育についての提言をまとめています。この検討委員会には、神戸市教委の要請により、当時の仙台市教委教育指導課長が委員として参加し、東日本大震災の教訓等も含めた提言がなされています。

私が神戸に着任したときには、神戸の防災副読本「しあわせはこぼう」に、すでに東日本大震災のことが教材化され、掲載されていました。そのスピードと意識の高さにとても驚かされました。阪神・淡路大震災から約20年の間、絶えず防災教育の在り方を見直し続けているその強い思いにとっても感銘を受けましたし、本市の防災教育も絶えず見直しをしていかななくてはならないと強く思いました。阪神・淡路大震災が起きたのは1995年1月の早朝でした。家屋の倒壊、火災による被害が大きかったのが特徴で、そのときの教訓を基に神戸市は防災教育を進めていました。

神戸が阪神・淡路大震災の教訓を学校教育にどのように生かしてきたかについてお話しします。神戸の防災教育の特長は主なものとして、①教職員により開発された豊富な教材②各教科に位置付けられた防災教育カリキュラム③震災追悼行事・防災訓練など各校の創意あふれる実践④地域団体や関係機関、大学、NPOと連携した実践⑤ボランティアなどの地域行事への積極的参加⑥「心のケア」の取組の継承が挙げられます。

神戸の防災副読本「しあわせはこぼう」には、教職員により開発された教材が多数掲載されており、毎年のように改訂や見直しが行われています。教材開発やカリキュラムの見直しに当たっては、防災教育推進校の指定を受けた学校での実践が基になっており、学校現場での実践が副読本の改訂に反映されるような仕組みとなっています。

震災から10年が経過した頃には、被災体験のない児童・生徒が入学してくるようになってきたことに伴い、ビジュアル版(DVD)「しあわせはこぼう」を作成配布し、各学校での活用を促しています。また、阪神・淡路大震災の教訓や命の尊さ、家族の絆、助け合いの大切さを伝えるだけでなく、津波や風水害、土砂災害など広く自然災害について学べるように毎年改訂されています。最近ですと海外の事例や土砂災害なども教材の中に入れて

いるのも特徴と思います。

震災追悼行事・防災訓練については、ほぼ全ての学校で年間計画に位置付けられておりました。特に特徴的なのは、消防局との連携がとても工夫されている点です。いくつかの学校の訓練の様子を見させていただきましたが、とても鬼気迫ったものでした。逃げ遅れたという想定も、誰にも教えておかず、消防とコミュニティの役員、校長先生ぐらいしか分からない中で、教職員が「〇〇ちゃんがない」と気が付き、検索して消防隊員が救出するといったリアリティある防災訓練等も見させていただきました。このようなところが大きな特徴と思いました。

震災追悼行事も、1月を中心にとどの学校でも行われていましたが、大学やNPOと連携しているいろいろな工夫がなされ、ずっと続けられておりました。

仙台に戻ってきてからも何度か神戸の学校の震災追悼集会でお話をさせていただいていますが、神戸の子供たちの防災についての食いつきの良さや真剣さを、20年以上たっても感じることができます。子供たちにしっかり根付いていると思います。長い継続の結果がそうになっていると思いますし、仙台の子供たちもそうあってほしいと思っています。

神戸では、震災体験を負の体験として子供たちの記憶に残すのではなく、これを乗り越えて、心優しくたくましく生きていく児童生徒の育成に努めることこそ、学校教育に課せられた使命であるとの考えの基、防災教育を推進してきました。本市の防災教育も神戸と同じ思いが根底にありますから、神戸の知見が基盤となっているのは間違いありません。私たちはあまり意識していないかもしれませんが、仙台での取組や実践の多くは、神戸の防災教育を参考にして考えられていますし、神戸のみなさんも、自分たちの教訓を生かしてほしいと願っているはずで、神戸から仙台へとつないできた防災教育は、「平成28年熊本地震」や「平成30年7月豪雨」など他の被災地にもその知見が受け継がれているはずで、本市には、その知見を継続して発信していく役割があるのではないかと感じています。

「仙台版防災教育」への各校の取組と成果

司会(菅澤) 岩田課長そして新妻管理主事から、「仙台版防災教育」の施策について、その意義や背景などについてお話しいただきました。

ここからは、各校における取組の実際として、取組の現状そして防災教育の成果・特色について、お話しいただきます。

川村事務局長 お話をする機会を与えていただき感謝申し上げます。最初に荒浜小学校の震災前後の様子や震災直後に体験したことについて話します。

地震による建物崩壊以上に、津波による無差別的な地域の流出は、大変喪失感が大きいものでした。その様子は、大人にも子供にもいつまでも脳裏に残る惨状でした。児童や保護者を含む約190名の方が亡くなりました。

荒浜地区では、津波を想定し、学校、地域、関係機関の地域合同防災訓練を行っておりました。

当時としては、数少なく、さらに津波も想定に入れた訓練をしていたことは、特筆すべきことだと思います。そのことが、校舎4階への児童の誘導、町内会ごとに各教室に避難させたこと、体育館は避難場所から除外した計画にしていたことなどの対応につながったのだと思います

震災後は、多くの方々から支援をいただきました。多くの子供たちが自宅を失ったり、避難所から通学したり、つらいことが多くありました。一方、様々な心温まる支援には、今も心から感謝しています。

いくつかを紹介します。まず学用品は学校再開に向けてすぐに活用することができました。また多くの義援金によって、保護者の経済的負担を最小限にできました。お陰で、校外学習など、他校と変わらぬ活動ができました。変わったところでは、宮城学院食品栄養学科の先生と学生さんからいただいたお弁当の支援も大変ありがたかったです。子供たちや保護者の多くは、他校の体育館に避難していました。自前の弁当を準備することは不可能でした。学生さんに動物園や見学先に、何度もお弁当を届けていただきました。子供たちは笑顔でそれを食していました。

日本中から支援をいただきましたが、特に神戸からの支援は忘れられません。寒さを考慮して手袋や帽子など防寒用具をいただきました。また、復興に向けた工事車両が急に増えたこと等を考慮し、全児童用に自転車用ヘルメットなどもいただきました。校長の私にとっては、7週間にわたる神戸市教委指導主事の先生方の派遣は、特に力強いものでした。一般のボランティアさんには頼みにくい、個人情報の整理整頓に当たっていただいたからです。被災者の立場を考慮した支援の数々に、今後私たちが行うであろう被災地支援の在り方へのヒントがあるのではないかと今も思っています。

さて、荒浜小や荒町小での取組について、少しだけ紹介します。まず一つ目は、防災家族会議についてです。災害の発生率から見ると管理下内の学校よりも家庭における防災対応も重要だと思っています。学校から各家庭に防災家族会議の実施を促しました。話し合う項目については、学校で準備をしま

した。例えば、指定避難所はどこか、避難時に必要な物資は何か等です。各家庭から様々な報告がなされました。子供たちが中心となって防災家族会議を進めた例もありました。子供たちは、学校で学んだことを、身近な家庭で、具体化したこととなります。その取組の中で、一般に言われている防災備品以外にも、身近な家庭で必要な物がたくさんあることが分かりました。例えば常用している薬等です。また子供だけで避難する場合にはドアにメモを貼っておく等、家庭ごとの決まりごとができました。とてもうれしいことです。こうした活動は、同じように荒町小でも行いました。

二つ目は荒町小での取組です。荒町地区での特色としては、避難所運営委員会が1年間常設してあることです。その常設の委員会が地域防災訓練や年間数回の学習会を定期的に行っていました。住民の意識高揚や安心安全なまちづくりに大きく貢献していました。

仲野校長 初めに前任校の蒲町小学校の時のお話を少しさせていただきます。神戸市PTA協議会から、6年生20名弱の子供たちが、神戸市PTA協議会フェスティバルに招待されました。子供たちが、神戸市民に向けて、被災状況と復興に向けた取組について発表しました。



その折に、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」という防災について発信する拠点で、防災の重要性やいのちの大切さを学ばせていただきました。阪神・淡路大震災のリアルな映像による追体験とともに、震災の体験と教訓を伝える語り部の方のお話を伺う貴重な機会となりました。震災の記憶を風化させない、次世代に語り継ごうとする学びが、防災の準備のために役立つ取組となっていると強く実感してきました。

さて、連坊小路小学校の防災教育についてですが、被災者の方の体験談と被災地域を訪問する経験から学ぶ活動について一つ紹介させていただきます。

本校は、大震災から3年経過した年から、6年生の総合的な学習の時間の年間指導計画に、防災教育の新たな学習テーマとして、被災者の方の体験と被災地訪問から学ぶ「レインボープロジェクト」を設定しました。本年度で5回目となり、本校の復興プロジェクトの柱となる学習です。活動のねらいは、子供たちが震災をもっと身近な問題として捉え、防災について多くのことを学び、子供たちのこれからの生活に生かしていくこととしています。

活動内容は、次の4点です。一つ目は、被災者の方々（民生委員）を学校にお招きし、発災時の状況

や、その時どのように考え、行動したか。どのようなことが大事だと考えたのかなどの体験談を聞くことです。二つ目は、被災地域や被災した東六郷小跡地と避難タワー、南蒲生浄化センター、震災遺構「荒浜小学校」や深沼海岸慰霊碑などを見学し、実際の被災の状況を映像や写真で見たり、説明を聞いたりすることです。三つ目は、学習を通して学んだことや感想をリーフレットにまとめ、校内や保護者、地域に情報発信し、防災の重要さや命の尊さ、支え合うことの大切さを伝えることです。四つ目は、学んだことを防災集会「復興プロジェクト」で全校児童に発信しています。

次に、被災された方々の子供たちへのメッセージの内容と被災地を訪問した子供たちの感想について、簡単に紹介させていただきます。

被災体験した5～7名の方々が、震災の語り部として、5年連続で御来校いただいております。

「私たちはレインボープロジェクトの一員なんだっちゃんね。」と、帰るときに必ずおっしゃってくださいます。子供たちに、震災体験と教訓を熱く伝えてくださる姿勢に、深い感謝と敬意を感じています。子供たちに話した震災体験の概要は次の様な内容です。3.11発災時、津波に追われながらのどっさの判断。生死を分けた避難時の緊迫した場面のことや混乱した街の様子、避難所での不自由な生活の様子等多岐にわたります。それらの体験を踏まえた上で、子供たちへ今後の生活に向けてメッセージしてくださいます。「津波はこれまで来なかった。」等の思い込みや過小評価によるバイアスがかかってしまったこと。日頃から命を守る行動をとる心の準備が必要なこと。災害に対する日常的な備えが重要なこと。避難所での生活は、協力して役割を果たすということが大事であること。積極的に、ボランティア活動をするのが大きな支えになること。障害のある方々や高齢の方々等避難行動要支援者に対する積極的な支援の必要性があること等です。代表の児童が、「災害等のボランティア活動の機会があれば、積極的に働きたいです。」と感想を話してくれたことが、大変印象に残っています。昨年度の被災地訪問した子供の感想を紹介します。「私たちの住んでいる地域や周りの様子だけを見ると、震災前と何ら変わりなく、元通りの生活を取り戻しているように見えます。しかし、東六郷小学校跡地や荒浜地区は、防風林がまばらなまま残っています。復興の途中であることを実感しました。津波被害によって閉校になってしまった東六郷小学校にも、受け継いできた校歌がありました。そこに当たり前にあるはずの、自分たちの小学校が無くなってしまふ現実を想像すると、とても悲しくなりました。慰霊碑には、5・6歳の子の名前もありました。その子が生きていた

ら、今の私たちと同じくらいの年になっていたと考えると心が痛みました。私たちが災害を防ぐために、できることは多くはありません。しかし、下の世代に語り継ぐことや、震災をよく知らない人に伝えることはできます。そのためにも、学んだことをしっかり心に刻みたいと思いました。」これは、昨年度の防災集会の際に、全校児童に向けて、発表してくれたものです。

26年から29年までの児童の感想を少し紹介します。「今こうやって学校に行けること、生きていられることが、幸せなことだと感じました。(26年)」 「復興は心の中のこともあります。みんなで協力し、助け合って生きていくことが大切なのだと改めて思いました。(27年)」 「みんなが命を大切にし、命を守っていくことが大事だと思いました。私たちにできることは、震災について詳しく学び、伝えることです。

(28年)」 「避難できる丘や高台を作ったので、津波被害が少なくなると思いました。(29年)」 このように、子供たちは、被災者の方々の心の痛みを思いを巡らせながら、防災や命の大切さ、復興について考えます。子供たちは、震災の追体験により、危機に対して判断し、行動する大切さを学びます。伝えることが重要であることを意識します。こうした学びのプロセスが、震災の記憶を風化させない、防災・減災の意識を醸成する契機となっていると強く感じます。一連の学習を通して、子供たちの先々の生活に、しっかり生かせる力を身に付けさせていきたいと考えています。

中辻校長 高砂小学校では、従来校内で取り組んできた火災・地震避難訓練に加えて、今年度から地域防災訓練に参加することになりました。高砂小学校の学区は、国道45号線沿いにあり、七北田川を挟



んで東西に広がっています。七北田川が大きな災害の時には、非常に危険な要素をはらむということで、川を渡るということが避難には非常に危険です。西側と東側に避難所が分かれる状態になっています。西側は高砂小が避難所ですが、東側は市内で唯一、高砂市民センターが学校以外の指定避難所となっています。ところが、西側の高砂小学校は、田子市民センターが中心となる田子中学校、田子小学校の防災訓練のエリアとなっております。

昨年度までは、その防災訓練の日程と川向こうの高砂市民センター側町内会の防災訓練の日程が違って、そこに学校全体として参加することができませんでした。本校の子供たちだけは田子側の地域防災訓練にも高砂市民センター側の防災訓練の時も任意参加という形をとっており、実質上は保護者が

参加するときだけ子供たちが参加するという、非常に少ない参加率だったということです。日程を調整していただいた結果、その東西の防災訓練を同日程で行うことが、今年度からやっと始まることになりました。そして、小学校も学校行事、授業日としてこれに参加しました。初めて高砂小の全児童として防災訓練に参加するという形をとることになりました。もちろん可能な限り保護者の参加をお願いし、その防災訓練を東西の実情に合わせながら、今年度は進めていきたいと考えています。七北田川の東側にある高砂中は市内で唯一津波で被災した中学校です。こちらは津波による被害が最も怖いと地域では不安視しています。そして西側、高砂小学校側は非常に海拔が低く、梅田川の増水等により内水被害が度々起っている地域です。そして、大きな内水が起きると、常に2メートル、3メートルの冠水が考えられると、市内のハザードマップで出ている地域です。それぞれの地域で被害に関する違いはあるものの、各避難所に避難するという大きな目標は一緒だと考えております。町内会ごとの防災訓練に参加するということとともに、全児童が避難所に避難する、地域にある自分の家からそれぞれの避難所に避難して来るという形をとることに、今回大きな意味があったのではないかと考えています。

防災の力は知識・技能・態度と三つの構成要素で考えます。そこでは校内での学習活動と地域と連携して行う教育活動を吟味・整理し、重点化を図ることが必要です。三つの要素を意識しながら地域の実態に即して効率的に実践することが大切と考えています。本校では通常の避難訓練の他に、避難場所確認を含めた「シェイクアウト訓練」、これも今年度から始めました。校舎内の津波避難場所での引き渡し訓練などを実施しています。これらを通して、児童の自助・共助の意識がだいぶ深まってきました。そして今回地域防災訓練を通して、保護者・地域住民の方々と連携しながら避難所への避難、町内会の防災組織の存在、その活用を踏まえた防災の力も高まりつつあるのではないかと考えています。そういった意味では、正に今年度は高砂小学校にとって、この地域におけるスタートラインではないかと考えております。

それではもう一つ、七郷小学校における取組の状況をお話しさせていただきます。七郷小学校は、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、平成25年度より4年間、研究に取り組んできました。そのテーマは、「自助と共助、夢や希望を育む防災安全」でした。そこでは、東日本大震災の教訓や体験を基に、防災教育を中心とした安全教育を独立した領域として創設しました。研究開発でしたので、特別な許可が得られました。児童が生涯にわたって自助と共助

の意識を持って行動していく力、防災の力を育む教育課程の研究開発をねらいました。

新領域・防災安全科として、育てたい資質・能力から目標と内容を設定し、各学年では取り扱う内容を選択し、単元としての取組を行いました。教育課程の編成では、「自校化と一般化」を意識して、発達段階に応じて「自助と共助」について学びを深められるようにしました。心のケアに配慮しつつも地震や津波といった災害を取り上げ、教訓を生かした単元づくりをしたことは、自校化（七郷小オリジナル）につながりました。また、防災安全科から一般の教育課程に戻った段階でも継続可能なコンパクトな学習プログラムにしたことが、一般化（防災スタンダード）、つまり大きな震災被害のない学校でも実践可能なものにすることができました。これが防災安全科の最終4年次の研究紀要です。中間のときと最終のときと2冊の紀要を出しておりました。中間公開のときには、東日本大震災を体験していた子供がまだまだ多かった時期でした。そして最終年度4年次になりまして、震災を経験していない子供たちがずいぶん増えてまいりました。そういう子供たちにどのように形で指導していくか、それがこの4年次の内容としては大きなウエイトを占めていました。

成果としては、次のようなことが挙げられます。「夢を育む」防災安全科を目指したことです。防災というと、被害、損害、恐怖…、というマイナスのイメージが先行しがちです。遭わないための知識・技能を習得・体験する活動が多いです。しかし防災安全科では、それに加え地域との連携や自分自身の備えや家族の備え等、そういうものを備えることによる安心感、自分たちが防災において役立っているという自己肯定感の醸成を目指しました。その結果、自助と共助を意識した、自ら考える行動が見られるようになりました。また、災害に対して、「自分たちは備えている」という前提を基に、安心感を持った学校生活を送ることができるようになりました。

4年間の初めのうちは東日本大震災経験者を前提とした学習でしたが、後半は次第に震災時未就学児および未経験の児童に対応した学習活動を工夫してきました。また、七郷中学校区学校地域防災訓練では、町内会や消防団、小中学校間で連携した活動を通して、大人数の地域ではありますが、「顔の見える関係づくり」を進めることができたことも成果と言えます。

震災を風化させない取組はどうあるべきか

司会（菅澤） ここからは、視点の二つめとして、この座談会のメインテーマであり、各校で意識して取り組まねばならない「震災の記憶を風化させない

取組」を含め、今後の本市防災教育への提言、そして「未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」への思いについて、お話を頂戴します。

まず、今後の推進にあたり、風化させないためのこれからの課題、また留意点を含め、神戸の防災教育を知る新妻管理主事からお願いいたします。

新妻管理主事 私が神戸に着任した時は震災から20年が経過していました。やはり神戸の方でも震災



の風化は大きな課題となっていた時期に着任しましたので、その時に見た、どういった課題があって、どんなことに取り組んでいたかについて紹介させていただきます。ちょうど震災から

10年経過しようとしていた平成16年に、震災の風化を防ぐため、震災を経験した市民の方からメッセージを募集し、子供たちに届ける「子供たちへのメッセージ運動」をやっていることを着任したときに教えていただきました。

この運動は、市民の方に積極的に働きかけて震災の体験を集め、震災後に生まれた子供たちが成人になるまで届け続けましょうということでスタートしたそうです。そのメッセージ集は仙台市の教育センターにもあるので、ぜひご覧いただきたいと思いますが、これは辛い体験を話せずにいた市民が、10年経ってその体験をようやく話せるようになったのが一つのきっかけであると聞きました。集められたメッセージは、毎年1月17日前後に市民ギャラリーに展示され、当時のことを脈々と伝えていく取組が教育委員会を中心として進められていました。

学校では、震災追悼記念集会在、いずれの学校でもだいたい1月17日前後に行われていました。地域により被災状況が違うので内容は様々ですが、校区内にある慰霊碑の前で、震災を経験した方のお話を聞いたり、あるいは防災訓練とか炊き出し訓練を組み合わせたなど、地域に応じた努力がなされて風化を防いでいるということを感じました。それからこれは、教育施策に関わることになりますが、東日本大震災後には、東北の被災地と交流することで震災の風化を防ごうと、市教委が東北を訪問する学校に費用を助成する事業を実施していました。東北の被災地を訪れて交流活動を行い、訪れたときの経験や感じたことを学校に戻って報告することで、阪神・淡路のことについても考える機会としていました。

これは私の仕事の中で感じたことです。各学校を訪ねた時に、校長先生や地域の方から阪神・淡路大震災当時の様子もお聞きしました。話を伺った校長先生や教頭先生は、30～40代に震災を直接体験しており、どこの学校も防災教育を柱にした学校経営をさ

れていたのが印象的でした。その中で、直接体験していない教職員が増えており、どのようにして次世代の教員に伝えていくか、お会いした校長先生の多くが、このことに悩まれていました。

それから初任者研修のときに話をさせていただく機会がありました。その際、神戸の出身ではない新任の先生から、「自分は神戸出身ではないんです。これといって防災教育を受けてきた記憶もありません。ただ、神戸の教員なので、震災のことは知っていて当たり前、防災教育はできて当たり前というそんな目で見られてしまいます。自分は体験がないだけに、子供たちにどうやって伝えればよいか不安だし、プレッシャーを感じています。」と話していたのがとても印象に残っています。

仙台でも、当然直接体験していない子供たちが入ってきますし、震災の体験がない教職員が増えてくるのは自明なことです。これから本市の防災教育を展開する上では、直接体験のない子供たちに伝えるためにどのような教材を開発していけばよいか継続して検討していくこと、それから直接体験のない教職員に対する研修の在り方というのも検討することが大切になってくるのではないかなと思っています。

幸い私は、仙台と神戸の両方を見る機会がありました。比較したときに仙台の方が工夫してるなと思う点が二つあります。1点目は防災副読本です。教科書との関連が示されています。ページを見ると学校行事や教科が示してあります。これは岩田課長が話していますが、とても意識しやすいものですし、カリキュラム・マネジメントという部分でも良い手掛かりになります。この点について、神戸の指導主事も「すごいね、仙台市。」とおっしゃっていました。2点目は、小中連携した防災教育といったものが進んでいることが仙台市の特徴だと思います。神戸は小学校区ごとに防災コミュニティという組織が地域と一体となってやっています。小学校と地域または中学校と地域という形で、それぞれでやっているという形がほとんどでした。小中が一緒になり、連携しながら防災教育に取り組んでいる点は、仙台のすばらしさであると思います。

課題としては、両市を比べた時、日常的に防災のことを意識できているのかという点です。例を挙げれば、神戸では復興ソングである「しあわせ運べるように」という歌を市民の誰もが口ずさんでいます。商店街に行ってもどこに行っても、年配の人も含めて皆が口ずさんでいます。仙台もせっかくそういう歌がありますから、「復興ソング」を今後も意識的に広めていくということも課題かと思っています。

中辻校長 震災の記憶を風化させない取組につい

て、お話をさせていただきます。

まずは今、新妻先生からもお話がありました「防災副読本」です。仙台市は小学校の下学年、上学年、中学校ということでの「防災副読本」を作成しています。それを全校で活用していますが、やはり活用法をもっとしっかり吟味していくことが必要だと考えています。

震災時にまだ生まれていない子供たちが、もう小学校に入学してまいりました。そのような子供たちに向けて、「防災副読本」と同様に、先ほど御紹介した七郷小学校でも年間計画を作っておりました。各学年のカリキュラムを作り、実際に年間指導計画を作成し、「防災安全科の学習指導要領」とうたっていました。この中でやはり大変大きなことは、1年生から6年生までが継続的にその学習を進めていくことではないかと思えます。この「防災副読本」に取り上げられている内容を、「ここで」「次はここで」という取り上げ方ももちろん大切ではありますが、それらがいかに計画的に、その学校や地域の実態に合わせて重点化され、継続的な指導になっているのかということが大切ではないかと思えます。今後更に、各校で「防災副読本」の活用に向けて吟味を重ね続けていくということが、地道なことではありますけれど、私は非常に大切なことと思えます。「防災副読本」の中にも震災を初めて知る子供たちにとって、とても大切な内容がたくさん含まれています。これらを、若い教員がどう子供たちと共に学んでいくかということも必要だと思えます。

二つ目です。本校にもありますが、各学校でも「復興プロジェクト」というような名称の行事や活動があると思えます。これは本市にとっては震災体験の伝承という点から意義ある活動であると思えます。「防災副読本」の中にある様々な知識であるとか、追体験をとおして学習していくのとまた別の意味で、この「復興プロジェクト」では態度面につながるようなところ、心の学習につながるようなところが非常に大きいのではないかと感じます。各校の防災教育の内容とこの「復興プロジェクト」を一層関連を図った取組にしていくということがとても大切なのではと考えます。例えば上学年が学習した内容を下学年に伝えていく活動であるとか、または学習した内容が他地域あるいは他校と交流できる形が取れると、これはより一層充実したものになるのではないかと思えます。

三つ目です。震災の語り継ぎを見聞きする体験、これが今非常に子供たちには足りなくなってきていると感じます。先ほど仲野校長先生のお話を伺いまして、震災遺構を見学しに行く、そして語り部の方からお話を聞く、やはりこうした活動がどの学校でも展開されていくこと、そういう活動が広がって

いくことが大切ではないかと思えます。

震災遺構「荒浜小学校」、ここは校舎がありのままの姿で残され、当時の写真等も展示されています。それによって津波の威力、脅威を目の当たりにすることができます。ここでの見学の活動を、七郷小学校では6年生の学習活動に位置付けています。上学年の防災教育の年間計画にしっかりと位置付けていくことが大切だと思えます。単なる見学に終わらせず、やはり一つの單元としてしっかりとしたものにするのが大切だと思えます。語り部の方々、そして震災遺構「荒浜小学校」の職員の方にも荒浜の方がいらっしゃいます。お話を聞かせていただけますので、ぜひ防災減災の意識を高める場として、震災遺構「荒浜小学校」の活用を進めていくことが必要だと強く思えます。

そして四つ目です。震災の知見と職員間の交流、先ほどちょっと職員もということが出てきました。市役所の「Team Sendai」が昨今報道で取り上げられています。私も直接には見てはみませんが、市の行政職の中で震災の経験談、朗読を通して追体験をする、そして教訓を受け継ぎ次の震災に備える、こういう形で若手の職員に伝える勉強会を開いているそうです。震災復興室の方々を中心にやって行っている活動です。市職員有志となっておりますが、これは仙台市だけでなく全国様々なところに発信されてマニフェスト大賞の優秀賞を受賞したというような記事もございます。このような活動を、私たち学校教職員としてもやれないだろうかと考えているところです。教職員の中に震災を語り継ぐことは、震災の知見の伝承、それから共有につながるのではないかと考えています。

学校経営の思いということでお話をさせていただきます。高砂小学校は「た・か・さ・ご」の四つの文字にそれぞれ意味を加えています。そのうち「さ」は支え合うという意味です。6年生が修学旅行から戻ってきますと「おかえりなさい」と5年生がメッセージを出してくれています。「復興プロジェクト」の中では6年生が縦割り活動の中で、主に低学年に折り鶴作りを教えてくれます。そして本校では多くの保護者ボランティアの方々が様々な校外学習でのお手伝いはもとより、人手が足りないときのシャトルランのお手伝いまでしていただきます。さらに地域や町内会の方々は「駆け込み110番」のお店を紹介してくださったり、学校ボランティア防犯巡視員として子供たちの日々の安全に心を配っていただいています。この「た・か・さ・ご」の「さ」、保護者、地域の支え合いを通じて、子供たちにより深く考えさせ、よりよい行動を育むこと、これが高砂小学校まず一つ目のキーワードと私は考えています。

そして二つ目は、顔の見える声の届く関係づくりを地域とともに育むことです。「地域とともに」という言葉を本校は地域に向けた学校のテーマの中に、「地域とともに育む」という言葉として使っています。地域防災訓練をはじめ、様々な学校行事を通して、その準備の中で様々な地域の方と連携を図っています。その中で学校、教職員、小学生、中学生が支え合い、声を掛け合うことで新しい知恵や行動、そして新たな協力関係が生まれると思っています。子供たちが地域と積極的に関わり、そして役立つことで自分の力を伸ばし、自分の良さを感じ取ること、これは地域の中における自己の立ち位置、大切さを知ることになります。それは自己肯定感を高めることになると思います。高砂小学校は地域と共に子供たちを育みます。それが子供たち自身の未来への期待と安心感にそして更なる成長につながることを信じています。

仲野校長 先ほどお話しした被災された方々から防災を学んで、被災地訪問する貴重な体験を今後も教育課程の中でしっかり位置付けていきたいと考えています。記憶の風化が、危機意識の低下につながるような、学びの成果を全校の子供たちや保護者・地域に発信し続けていきたいと考えています。

被災体験を話してくださった皆様が御高齢になってまいりました。皆様おっしゃるのは「年々記憶が薄れてくる。体力的にもここまで遠い所に来るのは大変なんです。歩けっぺか。」ということです。そこで皆様の御了解のもとに、今年は体験談をビデオ撮影により記録させていただきました。また、話の内容を文章に起こして活用しました。職員で共有して県外から来た若い先生も「ああ、こういうことだったんだ。」と改めて知ることになりました。今後も貴重な資料としてビデオや写真を整理して、本校の語り部の方の体験談と併せて、校内資料の展示の仕方を工夫していきながら、震災の記録と記憶を風化させない取組を続けていきたいと考えています。

二つほど提言としてお話しさせていただきたいと思います。

一つ目ですが、被災者の方々から、今後の防災に関わる取組に関して、本当に多くの示唆に富んだメッセージを頂戴しておりまして、その中の一つに障害を有する方や御高齢の方々への緊急時の避難対応についての話が残っています。

私事になりますが、先ほど川村先生からもお話いただきましたが、当時、緊急支援の役割を担当させていただき、直後に荒浜小の校庭に最初入った時、瓦れきの山の上に、女の先生が立っていました。このとき写真を1枚だけ撮らせていただきました。校長室に指導要録を取りに行った時の写真です。「お疲

れさま。」という川村校長先生の言葉が強く印象に残っています。瓦れきの上にはいらしたのは指導補助員の先生で、対象児であった子供が保護者と帰宅途中の車で亡くなったという話を伺いました。その他の被災地域でも、多様な障害のある子供が、困難な避難状況にあったエピソードをたくさん伺いました。

提言の一つ目は、特別な支援や配慮を要する児童生徒への安心を創る仙台版防災教育の視点に立って、教育計画の改善を改めて図る必要があることです。多様な障害のある児童や発達のアンバランスな子供たちがたくさんいます。子供たちの特性に応じた指導内容や指導方法の工夫を改めて見直していくことが必要だと考えます。

二つ目です。震災遺構「荒浜小学校」の防災教育への活用については、市教委からも活用の提言がありますように、東六郷小学校の跡地をはじめとする市内の被災跡地や施設を訪れることは防災教育を推進する上で大変価値があることです。また、被災者の方々は、「被災地域はもともと、大変住みよく、自然環境も戻りつつあるので、ぜひ見学に来てほしい。」と心から願っていると聞いています。しかしながら、震災遺構「荒浜小学校」は荒井駅から市バスの利用が必要ですし、運行数も限られていて、残念だと感じています。子供たちの貸し切りバスの利用が学校としては一番ですが、どうしても割高となってしまいます。今後、被災地へ訪問しやすくするための、予算的な一部助成等を含めた各方面の知恵の結集が必要ではないかと考えます。

「未来を切り開きたくましく生きる子供・災害に負けないたくましい子供を育てる学校経営」への思いとして、本校では防災教育を推進するため、保護者や地域はもとより、教育関係諸団体との連携をますます強化していかなくてはならないと考えています。レインボープロジェクトの推進については、御支援をいただいている社会福祉協議会やPTAの総会等、機会あるごとに、活動のねらいとともに将来の地域防災の担い手の育成につながる可能性があることを丁寧の説明し、理解と協力を得られるよう信頼関係を築いていきたいと考えています。

震災に負けない子供を育てる学校経営には、困難な状況に負けない、校長のリーダーシップが何より大切であることを日々学ばせていただいておりますが、3.11の沿岸部被災3校では川村校長先生をはじめとして、子供の命を守る判断がありました。また、校舎倒壊の危険性や校庭の地割れにより、近隣の中学校や児童館等を借りて授業を再開した学校も複数校ありました。体育館の手狭な用具室や家庭科準備室等を居場所にして学校経営にあたられていたことも承知しています。大震災の困難な状況の中で、気概ある学校経営の範を示された校長先生方の立ち居

振る舞い、そうした記憶が風化しないよう、仙台版防災教育を推進したいと考えています。

最後に蛇足になりますが、前前任校の旭丘小学校で、震災直後すぐに職員研修として、中野小学校の被災状況を視察させていただきました。状況を先生方の記憶にしっかり根付かせておかないと今後につながらないなと考えたからです。中野栄小学校も訪ね、本当に短時間ではありますが、中野小学校の先生方のお手伝いをさせていただきました。中野小学校、荒浜小学校、東六郷小学校の記憶が風化しないよう、心して学校経営にあたらなければならないと改めて強く感じます。

川村元荒浜小校長 私が行った初期の防災教育は、主として「災害対応力」に重心を置いたもので



です。どちらかという「教え込む」ことが多かったと反省しています。言い訳にはなりますが、余震が毎日あって、自宅がないほとんどの子供たちにまず伝え

たかったことは、当面の少しの安心感や災害対応方法でしたから、止むを得なかったとも思います。そういう意味では7年半が経ち、仙台の防災教育も充実期を迎えていると思います。退職してから気付いたことを自己反省も含めて五つ、そして最後をお願いをさせていただきます。

一つ目は、児童の学習についてです。ミサイル対応や今年のような酷暑の対応まで、私が現役時代にあまり考えなかったようなことも起きている昨今です。子供たちは災害から身を守る知識や行動が、より幅広く必要になっていると思います。しかし、その災害の一つ一つを学校の限られた時間の中で、訓練し、学ぶには限度があります。そこで、子供たち自らが災害の本質や特性を理解し、判断し行動できる「防災の力」の育成が必要となってきます。学びはグローバルに、避難行動はローカルに、「自分の足元に合わせて」行動することが大切です。

一方、災害後の避難所などで、様々な活動をして、多くの住民の方々に勇気づける子供もいました。ぜひそういう子供にも育ててもらいたいなというのが一つ目の願いです。

二つ目は、関連施設・地域を生かした活動についてです。震災遺構「荒浜小学校」をはじめとしてまだそのままの姿が残っている地域が仙台にはあります。残念ながら遺構の事務所の方からは、一番身近な仙台市内の活用が少なく寂しいと耳にします。

要因には、子供たちの心の問題や学習時間、経済的負担が考えられます。また、施設を活用した事例がまだまだ少なく、どのように活用したらいいのか分からないということも大きいのではないでしょう

か。最終的には教育課程に位置付けすることが大事ではないかと思っています。イベント型ではなく、地道な実践の積み重ねをこれからも続けていただきたいと思っています。

そのためにも、まず、職員研修として遺構や近隣施設を巡るのはいかかでしょうか。先ほどもお話がありました、震災遺構「荒浜小学校」やメモリアル交流館には、荒浜の元住民の方が何人か勤務しております。施設を利用し、直接お話を聞くことは、貴重な機会になるのではないのでしょうか。

三つ目は、家庭との連携についてです。今回の震災で感じたことは、「学校単独では、子供を守りきれない」ということでした。震災時、在校していた多くの児童を保護することはできましたが、救助された翌日からは、児童を各家庭に戻すことになりました。荒浜の場合は自宅流出のため、避難所で地域の方々と生活することとなりました。その姿を見て、学校単独で長期間にわたり児童を守るには限度があることに気付きました。そう意味では、特に地域や家庭との連携が必要不可欠です。この間、地域連携が大きく進んだと感じていますが、一番身近な家庭との連携、家庭の中での対応力と言ったら変ですが、そういうことはいかがでしょうか。ぜひ学校が中心となって取り組むよう呼び掛けるなどしては、いかがでしょうか。

四つ目は職員の研修です。かつては、学校の避難訓練といえば、各教室で学習しているという管理しやすい想定で行う場合がほとんどでした。でも学校の都合のいいようには災害は起きません。概して、起きては困るときに、さらに困る方向にどんどん事態は進んでいくことが多いものです。そういう意味では研修の中身を充実させることが大事だと思います。

荒町小でも幾つかの職員研修を行いました、あるときには、災害時のシミュレーションを行いました。災害時の想定を校長が行い、グループごとに対応を話し合ってもらいました。想定としては、地震はもちろんですが「一部学年が市外へ校外学習に行っていた」とか「不登校の子供が自宅にいる」とか「停電で校内放送は使えない」、「校長は不在で、携帯電話も通じない」等です。実際の災害時は、こうしたことが同時多発的に起こります。この研修の結果、新しい見方や対応も出てきました。これを私は「引き出し」と呼んでいます。「引き出し」をたくさん持っていることが、災害時対応の糧となっている方法が生まれてくると思っています。

それは、校長自らにも言えるかと思っています。「想定外」を減らすのは大変大事ですが「想定外」は必ず起きてくる。そのとき何をどの様に判断してするか、たくさん「引き出し」を持つことが、いざと

いうときに役に立つのではないかと思っています。

五つ目です。子供たちへのメッセージをぜひ校長先生からお伝えたいと思います。苦しい状況だったので、子供たちは長く不安を抱えたままでした。下を向いている子は今もいるのではないかと思っています。しかし、最後には、前に向かって歩んでほしい。これが私の願いです。

荒浜小学校に着任したときから、「いのち、ともだち、くじけない」というメッセージをずっと話してきました。震災後は、「夢、希望、未来」という話もよくしました。夢を持って前に向かって進んでいける子供にしたいと思ったからです。同時に職員にも話してきたことがあります。「空元気でいい。子供たちが前に向かえるよう笑顔で対応しよう。」という言葉でした。苦しいときほど、校長先生からのメッセージを子供たちはもちろん保護者や職員も待っていると思います。

最後に7年たった今、不登校などが多いんだという話をたくさん聞きます。今後一層のケアをお願いしたいと思います。同時に、あのとき必死になって頑張っていた職員への御配慮もお願いしたいと思います。これが私の五つの話題とお願いです。

司会(菅澤) 最後に、仙台市教育委員会から、今後の施策を推進していくにあたり、これから各校がどういった視点から「仙台版防災教育」に取り組んでいき、風化を防いでいくか、その点で学校運営について校長に期待することを踏まえまして、岩田課長から御提言を頂戴したいと思います。

岩田課長 先生方から様々な御意見・御報告を聞かせていただきました。大変勉強になりました。聞かせていただいた内容を踏まえながら大きく2点お話をさせていただきます。まずは各学校の取組として望むことについてでございます。

教育振興基本計画でも色濃く打ち出されたのが、今までお話のあった「風化への懸念」と「語り継ぐこと」の強調です。私は、震災を知らない子供たちが増えていく中で、まずは教師自身が自分の言葉で経験したこと、そこから学んだことを、きちんと語ることが第一歩ではないかと考えています。先生方御自身が貴重な教育資源であると思っています。

私ごとになりますが、私の父は長野県出身で海のないところで育ちました。私が生まれる前の年になりますが、チリ地震津波というのがありました。当時父親は大船渡の建設現場で働いており、「津波が来るから逃げろ」と周囲から言われても、津波というものがどういふものなのか理解できずに、しばらくそこに留まっていたところ、再度強

く促され、裏山に登った次の瞬間に津波が襲ってきたそうです。小学生の頃、酔った父によく聞かされた話です。私にとって、強いインパクトがありました。津波とは、怖いものなんだなと幼いながら思いました。

直接経験した者が、その者の言葉で「語る」ことは、大人もそうなのですが、子供たちにとっては、大きな痕跡を残すと思っています。そして、今地域には、同じように語れる人がたくさんいると思います。先ほど仲野校長先生と中辻校長先生から語り部の紹介がありました。そういった方々の話を直接聞くことも子供たちにとっては大変貴重な経験になると思います。意図してそのような場を設定していくことが求められると思います。

新妻管理主事から、神戸では皆が「復興ソング」を歌えると報告がありました。校長先生方も御存じのとおり、昨年度から、青少年オーケストラの全校合唱を「復興ソング」に変えました。これも「思いを語り継ぐ」ことを意識したものです。冒頭に「単発ではなく」ということに触れましたが、経験や知恵、そして、思いをつなげていくためには意図的な仕掛けが必要になってくるというふうに思います。一つ、忘れてはならないこととして、防災対応力の中に「共助」がありますが、震災時、皆で互いに支え合いました。そして、川村先生からも具体的な話を頂戴しましたが、全国から本当にたくさんの支援をいただきました。このことは、身を守ることの大切さとともに、やはり伝えていくべきことの大事な部分だということを付言しておきます。

もう一つ。大震災で、我々は地震と津波による大きな災害を経験していますが、そこで実体験を通して様々な教訓や知恵を得ることができました。一方で、先にお話をしたように、全国で私たちが経験したことのない、想定以上の様々な災害が多発してきているという現状があります。これから先、子供たち、ずっと仙台の地にいるとも限りません。それぞれの災害から、教訓や知恵を積極的に学んで、それを授業に還元していく、そういった姿勢が求められていると考えています。我々の経験や教訓というものをコアにしながらも、予測不能な未来に向けて、先ほど防災家族会議の話も頂戴しましたが、地域・家庭とも共有しながら、汎用的な防災対応力を子供たちに身に付けさせていく必要があると考えております。

校長としては、そのようなことを見据えたカリキュラムをどう構築していくか、という視点でマネジメント力を発揮していくこと、このことは、危機管理とも直結していくこととなると思いますが、考える必要があると思っています。

そのことに関連し、2点目として校長のリーダーシップのもと、今後の本市防災教育に期待していることをお伝えしたいと思います。

今、マネジメントということについて触れましたが、例えば、話題にも上ってました昨年度開設された震災遺構「荒浜小学校」があります。先に子供の言葉として、「防風林もまばら」という言葉がありました。実は私自身先週も荒浜に足を運んできましたが、家屋の基礎だけが残っています。そこに、草がなびいていました。そんな周辺部の風景をも含め、これから先、震災の経験のない子供たちが増加していく中、教訓や知見の伝承、災害を意識できる市民づくりという点で、大変有効な生きた教材となると考えています。平成30年度で言いますと、小学校が14校、中学校では3校が活用する予定となっています。この数字ですけど、川村先生が御指摘のように残念ながら市外から学習に訪れる学校の方がはるかに多い状況にあります。授業時数とか経費とか、解決しなければならない課題もあることも重々承知の上、なお、実際に甚大な被災があった地元の事実として、子供たちに学習をさせたい場所の一つだと考えています。

今、震災復興室と宮城教育大学が核となり、ここに教育委員会も協力し、実践事例が少ないという話を受け、現地のガイドブック作成を進めたり、先ほどの提言のとおり、教育指導課としましてもバス代の予算要求を行ったりと、その条件整備にも努めているところです。

震災遺構「荒浜小学校」を一例として挙げましたが、まず将来を生きていく子供たちに、防災対応力という観点からどんな資質や能力を身に付けさせたいか、身に付けさせるべきかということを考える必要があります。先ほど中辻校長先生から地域とともに育むことを大事にしたいという話がありましたが、そのためには、地域との関係づくりも含めて、「教育資源」として何を活用するか、横断的なカリキュラムをどう組み立てていくか、その骨子の構想、具体的なマネジメント力が求められていると考えています。

最後になります。この5月、すでに御存じのとおり大川小学校に係る仙台高裁の判決がございました。学校及び行政には、「安全配慮義務」にとどまることなく「安全確保義務」があるとし、ハザードマップ以上の専門性を求めるという、教育行政及び学校現場にとっては大変厳しい判決となりました。これからさらに、最高裁の場で争われることとはなりますが、先ほど仲野校長先生から校長のリーダーシップこれが何よりも大事だという話をいただきました。それから川村先生からはシミュレーション活動の具体的なお話もいただきましたが、校長とし

て、危機管理の視点から、このことの受け止めをしっかりと持つ必要があるのかなと考えています。

今後とも行政と現場、共に力を合わせて仙台のためにやっていけたらと思いますのでよろしくお願い致します。

司会(菅澤) 最後に、本日の座談会のまとめを含めまして、吉田会長からお話をいただきます。

吉田会長 ただいま、5人の皆様から、本当に貴重なお話を頂戴いたしました。ありがとうございます。お話を伺い、多くの皆様にこの話を生で聴いていただいたかったと思いました。もったいないという思いです。

さて、まとめのお話ということですが、感想を含めまして、大きく三つのお話をさせていただきます。

一つ目は、「仙台版防災教育」に関わることです。

仙台市が目指す防災教育の方向性につきまして、岩田課長よりお話がありました。その中で、特に大事にしていかなければならないことをキーワードで示すと、「自分ごと」ということになるのではないかと思います。「仙台版防災教育」が、災害時に自他のために適確に行動できる力を身に付けさせることを目指しているわけですから、まさに「自分ごと」として子供たちが意識するような取組が必要です。そのために、学校の実態に即したカリキュラムを作成するとともに、打ち上げ花火ではなく着実な実践の積み重ねを継続して根付かせることが必要になってきます。本日、御紹介をいただきました連坊小路小学校や七郷小学校の実践事例は、まさに、「自分ごと」につながる取組であり、参考にすべき事例だと思いました。

また、新妻管理主事より御紹介をいただいた神戸市の先行事例は、仙台市の今後の防災教育を進める上で、多くの示唆に富んだ内容だったと思います。特に、スピード感をもってカリキュラムを改訂していること、震災体験を負の体験として記憶に残すのではなく、これを乗り越えて、心優しくたくましく生きていく児童の育成に努めることこそが学校教育に課せられた使命であるという明確な方向性が示されていることは、参考にすべきことと思いました。

二つ目に、震災の記憶を風化させない取組についてお話をいたします。

本日、なるほどと思えるいくつかの取組を御紹介いただきました。その中で、私自身が特に必要だと思ったことをお話します。まず、新妻管理主事から御紹介いただいた神戸市の「子供たちへのメッセージ運動」や連坊小路小学校における「レインボープロジェクト」のように、震災を体験した方々から直接お話を伺うことが、効果的な取組の一つだろうと

ということです。また、震災遺構として公開されている荒浜小学校を見学することによって、津波の威力や脅威を実感できるものと思います。さらに、子供を直接指導することになる教職員への語り継ぎも必要で、今後、教職員を対象にした研修についても、仙台市全体として検討していかなければならないと思います。

三つ目に、「未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」への思いについてお話をいたします。

このことについては、川村先生の話が強く印象に残りました。震災当時、校長として勤務していた荒浜小学校で津波被害に遭い、想像を絶する恐怖を体験したことや極限状態における校長としての判断・行動は、まさに、想定外の出来事であり、実際に経験した方であれば、気付かない、話せない内容だったと思います。その中で、特に学ぶべきことは、機会があるごとに、「都合の悪い想定上の対応」をしておくということです。予想もしていない多角的な見方や対応を経験することにより、「引き出し」を増やし、「想定外」を減らすと同時に、「想定外」は必ず起きるものとの覚悟が校長には必要であるということが心に残りました。

また、岩田課長より、将来を生きていく子供たちに、どんな資質や能力を身に付けさせたいのか、身に付けさせるべきか、そのために、「教育資源」として何を活用するのか、教科横断的なカリキュラムをどう組み立ていくのかを構想し、マネジメント力を発揮することが必要である、というお話をいただきました。マネジメントを行うのは、言うまでもなく我々校長であり、危機管理と直結しますので、最優先事項として校長が取り組まなければならないという思いを強くいたしました。

さらに、川村先生から伺った「空元気でいい、子供たちが前に向かえるように笑顔で対応しよう。」と震災当時の荒浜小の教職員に声掛けしたという話は、極限状態にあっても、子供たちの状況を踏まえたすばらしい名言だったのではないかと思います。

簡単な短い言葉の中に、校長としての思いが詰まっており、当時、最も大事にすべき方向性、言い換えれば、その時の学校経営の方向性を明確に示したものと思います。

結びに、本日お集まりいただきました皆様や企画・運営にあたられた広報部の校長先生方に感謝を申し上げますとともに、地震に限らず、様々な災害にも対応可能な防災教育が、仲野校長先生のお話にあったとおり、校長がリーダーシップを十分発揮して、各校で実践されることを願ひまして、私からのお話を終わります。

【挨拶】佐藤広報部副部長代理 本日は御多用のところ、仙台市小学校長会長 吉田先生、仙台市教育委員会 岩田教育指導課長様、教職員課 新妻管理主事様、元仙台市立荒浜小学校長 仙台市小学校長会長 川村事務局長様、そして、連坊小路小学校長 仲野先生、高砂小学校長 中辻先生、に御出席いただき、貴重なお話を伺うことができました。心から御礼申し上げます。

本日は、「震災の教訓を風化させないための取組」をテーマに、「仙台版防災教育」の取組や、各校における震災を風化させないための取組や今後の提言をもとに、未来を切り開く子供たちを育てようとする皆様の意欲や熱い思いから、今後の指導におけるたくさんの手掛かりをいただきました。また、改めて「教育振興基本計画」に示された理念を確認するとともに、今後の校長としての危機管理や学校経営のあるべき姿について思いを新たにすることができました。

皆様から紹介していただいたお考えや、各学校の実践の様子などについて、平成31年1月発行の「廣瀬川95号」に掲載させていただき、確実に会員に伝えたいと思います。また、仙台市小学校長会が目指すこれからの学校経営の在り方について、全国の小学校長会の皆様にも発信してまいる所存です。

皆様、本日は、誠にありがとうございました。以上、御礼を含め、閉会の挨拶とさせていただきます。



提言

復興に向けた創意ある教育

地域に根ざした防災教育を目指して

第1地区会長 早坂 忠好 (金剛沢小学校)

東日本大震災から7年半が過ぎました。震災での大きな被害がなかったこともあり、本校や学区内町内会でも震災の風化は確実に進んでいます。7年が過ぎた今、本校では改めて地域とともに災害への備えや学習活動について考え、行動しようとしています。

本校においては指導計画や避難訓練等の見直しを行い、「東日本大震災」や「防災」について学ぶ機会の充実に努めています。教科や道徳の指導内容、校外学習や総合的な学習の時間における指導内容の再検討や関連付けを行い、風化を防ぎ災害時に自ら行動できる児童の育成を目指しています。また、地域と防災に対する意識を共有するための打合せを行ったり、学校の避難訓練に地域の方々に参加していただいたりしています。地域の方々の参加は、学校と地域の連携を児童に意識付けるとともに、町内会との意志の疎通を図るよい機会にもなっています。

さらに、「小中学びの連携」の一つに「防災に関する取組」を加え、児童や生徒の防災意識の高揚や災害時の小中連携の在り方などについて協議してい

ます。指導に当たっては、児童・生徒の防災に関する態度や知識・技能の程度を確認し、実態に応じた年間計画をともに考えながら作成していく予定です。

最後に、本校は開校以来音楽のある学校として音楽活動に力を注いできました。吹奏楽部や合唱部は、コンクールでの活躍に加え、地域行事での発表などを積極的に行っています。音楽を通して心豊かな児童を育てるとともに、地域との音楽を通じた結び付きを大切にしています。また、学区内にある天沼の清掃活動や浄化活動にPTAや児童が関わり、町内会、市民センター、児童館等とのつながりを深めています。PTAが配布する「エコマネー」は、バザーでの使用や文具の交換に使えとあって皆様に喜ばれ、奉仕活動等への積極的な参加の一助となっています。

本校が取り組んできた音楽活動や奉仕活動等を通して、児童に地域を愛し守ろうとする心情を育てたいと考えています。また、地域との結び付きや小中間の連携を今後もしっかり維持しながら「地域に根ざした防災教育」に取り組んでいきたいと思ひます。

提言

復興に向けた創意ある教育

心のふれあいのある学校を目指して

第3地区会長 高橋 淳 (北仙台小学校)

9月に北海道において震度7を記録する地震が発生し、甚大な被害が出た。東日本大震災の記憶の風化が課題となる中、校長として大地震への備えや防災教育の大切さを再認識させられた。

本校では、昨年度「仙台版防災教育研究推進取組発表校」に認定されたことを契機に、防災教育計画の見直しを図った。授業参観では、全校で防災の授業を公開したり、下校時に親子で通学路の危険箇所確認を行ったりした。

一方、教職員の防災意識を高める目的で、全職員で旧荒浜小学校の震災遺構を見学した。震災当時、荒浜小に勤務していた本校職員のリアルな体験談に参加者全員が真剣に聞き入る姿が見られ、石碑に刻まれた幼児の名前を目にし、号泣する職員もいた。津波被災校に勤務した経験がある校長として、この研修を企画して本当に良かったと思った。

大震災から7年が経過した今年度、北仙台小学校では「生き生きと活動し、心のふれあいのある明るい学校」を目指した学校づくりに取り組んでいる。

「心のふれあい」をキーワードに学校経営を進めており、校長として様々な機会を通してこのキーワードを用いて発信し続けている。

学校要覧の表紙には、本校を象徴する5枚の写真(運動会の全校よっちょれ・児童会の若草まつり・若草オリエンテーリング・函館修学旅行・水の森合奏団の活躍)が掲載されてある。いずれも本校の特色ある教育活動である。特に、本校では、たてわり活動に力を入れており、年間を通して学級や学年の枠を越えて仲良く活動する姿が見られる。若草オリエンテーリングもその一つで、さわやかな秋、たてわりの小グループで学区内に出かけ、公園で遊んだり、一緒にお弁当を食べたり、楽しい一日を過ごす。ここでも異学年の子供たち同士の「心のふれあい」をたくさん見ることができる。

PTAや学校支援地域本部「りえぞん北仙台」の力強い支援に支えられながら、今後も「心のふれあい」のある明るい学校を目指した学校経営を進めていきたいと思う。

提言

復興に向けた創意ある教育

双方向の連携

第5地区会長 津久井 隆之(原町小学校)

本校は、伊達政宗が仙台城築城にあたり、南目村、苦竹村、小田原村を併せて原町として栄えた場所に位置し、今年度で145周年を迎えた学校である。平成9年6月まで、校庭の中央に樹齢120年を越す「柿の木」の勇姿が子供たちを見守っていたが、強風で倒れてしまった。しかし、平成23年3月の震災後、地域の方々の学校を思う熱い気持ちから平成25年9月「柿の木応援団」が発足した。

「柿の木応援団」は、学校と学区に居住する住民及び地域団体が双方向に連携し、原町を活性化することを目的としている。地域から学校に対して、いろいろな教育活動に対する支援と毎日児童の安全を見守っていただいている。また、学校から地域に対しては、地域の行事などに積極的に参加(学校として・個人として・子ども会として)したり、地域の皆さんに挨拶運動を繰り広げたりしている。つまり「柿の木応援団」は、地域・保護者・児童・教職員が一つになった組織である。

昨年度、「柿の木応援団」の事務局は、宮城野中

学校区の学校支援地域本部の支部校として認められ、更に活動の輪を広げている。その活動は、野外活動の野外炊事や家庭科のミシン、調理実習の支援にはじまり、総合的な学習の時間の弟子入り体験や地元学、クラブ活動の講師、町探検、校外学習やチューデントシティ、スポーツテスト、陸上記録会の支援、毎日の登下校の見守りなど、多岐にわたっている。また、子供たちは、原町本通りの花壇の花植えや「柿の木合唱団」「柿の木バンド」の地域行事への出演、「少年消防クラブ(BFC)」「ジュニアクリーンメイト」「原町キッズもりあげ隊」などの活動を通して、地域の活性化に努めている。

小学校の教育活動を地域の皆さんが応援して、より教育効果を高め、子供たちが積極的に地域に出て盛りあげる。双方向の連携を通じて、顔が見える関係づくりから、明るい地域・笑顔あふれる学校が生まれる。このような毎日の積み重ねが復興に向けて大切なことだと日々感じる。子供たちが地域や学校を誇りに思える活動を今後も推進したい。

提言

復興に向けた創意ある教育

地域で育つ子供たち

第7地区会長 福田 喜美恵(東長町小学校)

東日本大震災から7年が経過したが、あの日の出来事は決して忘れることができない。誰もが同じ思いであろう。命の大切さや人と人との支え合いの必要性、自然の脅威など、学んだことは数多い。風化させることなく、今後も継続して、子供たちに「自助・共助」の力を育成していかなければならない。

今年度、本校では、協働型学校評価重点目標を「学校内外で積極的に挨拶を交わす児童の育成」と設定した。特に、関わりのある地域の方々にも進んで挨拶ができることを具体目標に掲げている。子供たちには地域の中で生活していることに気付かせ、地域の方々とのつながりも意識させたいと考えた。

本校の学区には、郡山遺跡や西台畑遺跡をはじめとした歴史的文化的遺産が豊富な昔からの町並みがある一方で、あすと長町の開発が進み、大型商業施設や高層マンションが建設されているエリアもある。様々な公共施設もあり、自然環境も豊かで、教育活動を展開する上では非常に恵まれている環境である。

「地域について学ぶ」「地域から学ぶ」教育活動

の一端を御紹介させていただきたい。

1学年の「昔遊び」では、昔からの遊びを通して地域のお年寄りと楽しく触れ合う機会を設けている。

2学年の「町探検」では、様々な商店や公共施設等を訪問し、地域への関心を高めることができる。

3学年は、農家の方々に御指導をいただき、栽培活動を体験させ、地域の良さに気付かせている。

4学年では、昔の東長町や町の移り変わりについて調べ学習を行う。地域の方の体験に基づいたお話は大変興味深く、意欲的な学習につながっている。

5学年では、広瀬川や名取川での体験学習から自然のすばらしさや自然との共生について学んでいる。

6学年は、地域での職場訪問を通して、自分の将来や生き方について思いや考えを深めさせている。

「子供は地域の宝」と、慈しみ育てていただいた経験を基に、今後どこで暮らそうとも、その地域の一員としての自覚と誇りを持って行動してほしい。子供たちが、優しさとたくましさ、しなやかさを持ち、未来を切り開いていくことを心から願っている。

学区紹介 地域とともに

枡江の森で
地域・学校・人をつなぐ

菊地 和則 (枡江小学校)

業間休みには、子供たちが入って遊べる枡江の森。道路を挟んで校舎の向かい側には、遊歩道があり憩いの場となっている与兵衛沼。これが枡江小学校ならではの豊かな自然環境です。

3年前に着任し、しばらくして仙台市の百年の杜推進課の方が来校されました。小学生に自然体験学習林の活動プログラムを実施してみませんかという御提案でした。学校側では、日時の調整をするだけで、指導者や費用もほぼ全て、百年の杜推進課で用意してくださるといので、すぐに飛びつきました。実際に打合せが始まると、さらにいいことばかりが続ききました。指導者として来校される皆さんは、森だけでなくいろいろな分野で造詣が深く、教員にも大きな刺激を与えてくださる方々ばかりなのです。2年目からは、市内の他校の児童が枡江の森にやってくることになり、当校では毎年、5年生と一緒に活動しながら、他校の児童と交流するように教育課程を整えました。

枡江小は、通常の学級は全て単学級でクラス替えがありません。そうした中で、他校の児童との交流は、とても価値のある活動です。これがきっかけで、現在は、地域の市民センターで枡江の森の魅力を発信する講座が開始されました。百年の杜推進課と連携しながら、校長は、学校支援地域本部のスーパーバイザーさんと一緒に、その講座の内容を検討する会議などにも出席しています。この会議には、地元の有志の方々を中心に、市民センター、行政、学校からの関係者が集まり、この地域の良さを広めるための話し合いが行われています。おかげで、博識で人脈の広い新たな講師を教員につなぐこともできました。

地域の良さである学区民運動会や町内会連合会の夏祭りが、これからも学校で開催されるには、次の時代を担う人たちの輪をつくることが急務です。

校長は、学校支援地域本部の支援を得て、各所、そして関係する人たちをつないできました。着実にこの活動が継続し、みんながつながって街づくりに協力する人の輪が、少しずつ大きくなっていくことを願っています。

学区紹介 地域とともに

魅力ある温かい地域の中の学校

駒沢 健二 (遠見塚小学校)

遠見塚小学校は、東隣に市内では1番大きな墳墓である遠見塚古墳があり、バイパスを隔てると霞目飛行場がある場所に、仙台市第42番目の小学校として開校した。

本校では、毎年10月の第2土曜日に、児童会主催の「古墳祭り」とPTA主催の「バザー」が行われる。前述した「国史跡、遠見塚古墳」を会場にして祭りの開会式が行われる。その後、会場を校舎内に移して、学年たてわりごとの「出店」が並び、全員交代で活動をする。一人一人の子供たちがとても楽しそうに時間を過ごしている。そこには、高学年が中心となって考えたルールがあり、全員が本気で楽しめよう工夫がされている。子供たちの中に引き継がれた「とおみっ子」ならではの大切な伝統といえる。

昼からは「バザー」のお店にチェンジして、大人から子供まで、買い物に興じることになる。子供た

ちにとっては、普段の学校が別のもの変わったような自由な空間となり、ゆっくりと時間が流れていく感じだ。様々なお店が並び、食券を握りしめた子供たちを大人が温かく包み込む。体育館では「昼食」を取りながら、ステージ発表を見ることができる。先生方や地域の各団体の登場に、大人も子供も大盛り上がりとなり、遠見塚小学校ならではの地域を生かした行事のボルテージは最高潮に達する。

春の学区民大運動会、夏の盆踊り大会を含め、学校を自分たちの地域のものとして受け入れていただき、大きなサポートで温かい雰囲気の中、それぞれが開催できていること、これは地域力そのものだと考える。元気のいい子供たちは、様々な経験を通して地域の中で立派な大人となっていく。「魅力ある大人がたくさんいる地域には、間違いなくその力を受け継いだ子供たちが帰ってくる。」そんな思いが地域の方々の取組から伝わってくる。

海よりも深い愛情を持った保護者の皆様と、熱い情熱を持った先生方と、温かい心を持った地域の方々から育てられた遠見塚小学校の子供たちの明るい未来を、微力ながらしっかりと応援していきたい。

研究部から

今年の研究部の活動を振り返って

研究部長 鶴谷 研 (長町小学校)

1 はじめに

今年度も7月に行われた第58回東北連合小学校長会研究協議会青森大会(以下東北連小青森大会)を皮切りに、10月には第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会(以下全連小北海道大会)、11月に第71回指定都市小学校長会研究協議会名古屋大会(以下指定都市名古屋大会)と、三つの大きな研究協議会と第42回宮城県小学校長会研究協議会仙台大会が開催された。仙台市小学校長会からもこれらの大会に多くの会員が参加し、学校が直面する様々な学校課題の解決に向けて校長が果たすべき役割と指導性について研究協議を深め、学校経営に生かすことができた。

仙台市は今年度に限って、どの大会においても研究発表の担当がない年であった。一方、学校課題委員会では、2年間取り組んできた「チーム学校」「多忙化解消」から、新たな課題に取り組むこととなった。2年後の東北連小宮城大会では「評価・改善」を担当するので、仙台市が独自に取り組んでいる「協働型学校評価」を研究の柱に据えた。11月の研究協議会では協働型学校評価の導入時に関わった菅野茂太白区理事を招いて御講話いただき、改めて導入の趣旨を確認し今後の実践に反映されることが期待される。指定都市問題研究委員会では、来年度の千葉大会に向け「特別支援教育上の諸問題」について研究の準備を進めている。領域別研究委員会は平成31年全連小秋田大会に向けて研究に取り組み、平成32年度の宮城大会に向けての発表準備にも着手した。

2 東北連小青森大会(平成30年7月5日～6日)

昨年度の山形大会の成果を引き継ぎ、青森県八戸市で開催された。東北各地から1,085名の校長が集い、仙台市からは約半数の61名の会員が参加した。

【大会主題】

「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く

日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
—郷土に誇りをもち、未来を主体的に拓くたくまし

い子どもの育成を目指す学校経営と校長の在り方—

大会1日目は会員を迎えるプレゼンテーションに始まり、開会式、そして記念講演が行われた。はじめに青森県中谷保美会長から豊かな文化と自然を有し、水産業や工業の中核都市青森県八戸市への歓迎の挨拶をいただき開幕した。その後、「未来をつくる子どもたち ～ふるさと・ひと・まち～」をテーマに郷土八戸を愛し、まちづくりに活躍している3人の講師を招いてシンポジウムが行われた。フロンティア精神に満ちあふれ、ふるさとづくりに精神的に活躍されている3人の方のお話は、校長の学校経営に資するものであった。

2日目は30年度から始まった新しい10分科会での研究協議が2会場で開催された。宮城県からは二つの分科会で話題提供を行った。

○第6分科会 「研究・研修」

視点① 実践的な指導力を高める校内研修体制の推進
「豊かな学びと体験を創出する学校組織の形成と校長の在り方」

(発表者) 柴田町立西住小学校 熊谷 浩 校長

○第7分科会 「学校安全」

視点① 自ら判断し行動できる子どもを育てる安全教育の推進

「自ら判断し行動できる子どもを育てる安全・防災教育の推進と校長の在り方」

(発表者) 加美町立旭小学校 林 恵美子 校長

分科会においては、視点①は東北ブロックの各県が、視点②は開催県の青森が話題提供し、研究協議の柱を設けながらワークショップによる協議が行われた。東北各県の地域の実情や学校規模もそれぞれではあるが、互いの教育実践、学校経営上の課題なども含め活発に意見が交わされた。この後、分科会ごとに閉会行事が行われ、次年度全連小開催となる秋田大会へ引き継がれた。

3 全連小北海道大会(平成30年10月4日～5日)

全国各地から2,400余名の会員が北海道函館市に

集い全国大会が開催され、宮城県から25名、仙台からも13名、合計38名の校長が参加した。

【大会主題】

「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く

日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～ふるさとの地から世界を見つめ新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進～

1日目の開会式では、種村明頼全連小会長が北海道を含めた被災地へのお見舞いの言葉と挨拶を述べられた。次に北海道大会実行委員長の本間達志会長からは分科会の充実に向け「参加型から参画型」を目指し効果的な視覚化を取り入れ、分科会の深まりに努めることが示された。文部科学省講話では第3期教育振興基本計画で示されている教育施策の重点事項や新学習指導要領との関連について簡潔に御説明をいただいた。

その後、13分科会が7会場に分かれて研究協議会が開催された。1会場200名前後とたくさんの会員が参加し30余りのグループを編成した。視点①については全国ブロックから、視点②は開催地ブロックから研究発表をいただき協議が行われた。東北ブロックは青森県から第1、第6分科会で発表を行った。

2日目は研究協議会のまとめの報告の後に、シンポジウムが行われた。スキージャンパーの葛西紀明氏、HTB放送の佐藤麻美氏、PTA連合会顧問の青田基氏の3人によるシンポジウム「ふるさと・挑戦・未来創造」をテーマに、自らの道を究めた人生を振り返りながら、三つの視点で話され、今の子供たちへ、そして校長への期待も含めてお話いただいた。これを受けて全連小調査研究部長の針谷玲子氏がまとめ閉会となった。

4 指定都市名古屋大会(平成30年11月8日～9日)

全国20の政令指定都市と東京都、21都市の代表300名あまりの会員が参加し、研究協議会が開催された。仙台市からは指定都市問題研究委員7名を含む11名が参加した。

【大会主題】

「直面する教育課題に主体的に向き合う学校経営の推進」

1日目は「ウィンクあいち」を会場に、政令指定都市20、東京都を含め21都市400名あまりの会員が集まって開催された。開会式では名古屋市の川北貴之会長より、今年度は大会日程の短縮を図りながらも、

変動する社会情勢にあって学校が直面している多種多様な教育課題や大都市が直面する諸課題の解決に向け、校長が果たすべき役割と指導性について研究協議を深めたいと挨拶があった。わずか30分弱のコンパクトな開会式の後、早速各都市の参加者が6会場に分かれて研究協議会を行った。今回は仙台市の研究発表はなく、それぞれ6分散会に参加することとなった。分散会に参加した会員からは、指定都市ならではの共通する課題、地域によって異なる取組など、充実した研究協議が行われたと感想があった。休憩をはさみ、後半は話題別情報交換会を行った。「予算」「人的配置・人材育成」「安心・安全」「働き方改革」「授業日数・時数」「評価」と六つの話題に分かれて情報交換を行った。全連小とは異なり21都市という機動力のある研究大会だからこそできる協議であり、大都市という同じ立場で情報交換もでき実りある協議となった。

2日目は教育講演「一流アスリートへのコーチング～可能性を引き出すために～」をテーマに中京大学名誉教授 湯浅景元氏による講演が行われた。コーチングの3原則やティーチングとの違いなどを伺い、学校経営にも生かせる有意義なお話であった。この後、次年度開催地となる千葉大会へ引継ぎ、閉会となった。

5 その他

研究部では年度末にそれぞれの活動を研究紀要にまとめて報告していく。また、全連小や東北連小では県の窓口は一つであるので、県と市が県市研修部連絡協議会を通じて連携を図り、今後の研究に向けて計画し連携して取り組んで行かねばならない。

仙台市小学校校長会は、平成32年度には東北連小宮城大会の主管となり開催していく。来年度は本格的に実行委員会を運営し、各部で連絡調整を図りながら準備を進めていくことになる。新学習指導要領の全面実施など、今後の教育界の動向も十分に把握しながら研究を進めていく必要がある。

今年度は仙台市小学校長会の皆様に研究部へたくさんの御支援と御協力をいただき心より感謝申し上げます。来年度はこれまで以上に結束して、校長会の研究を力強く推進していかなければならない。

生徒指導部から

命と心を守り育む教育への取組

1 今年度の活動にあたって

「杜の都の学校教育」の重点と連携し、今年度、小学校長会では「命を大切にす教育の一層の推進」「いじめ防止、不登校対策の推進」「心の健康教育の充実と強化」を活動の重点に据えている。生徒指導部では、これらの重点を基に、「児童の健全育成等今日の課題に対し、その指導と対策の充実を図り、各校における学校経営及び校長としての取組に資する」という方針を掲げ、活動を行ってきた。活動の三つの柱である「調査研究」「関係機関との連携」「復興七夕」について、その活動概要を記す。

2 活動の概要について

(1) 調査研究の推進

平成28年度から取り組んでいるテーマである「いじめの未然防止に取り組む学校経営と校長の役割」について、3年次の調査研究を推進した。今年度も、全小学校の校長の協力により、アンケート調査を実施し、その結果を基に、校内体制、教育課程における工夫、職員の研修、保護者・地域への啓発といった視点から、校長がどのようにリーダーシップを発揮し、各校でどのような取組を進めているのかをまとめ、その考察を行っているところである。研究紀要にて調査研究の内容を提供し、各校の工夫された取組の共有、活用が図られるよう進めていきたい。また、各校が抱える生徒指導上の課題についても調査を行い、学校における課題について集約を進めており、次年度以降の調査研究の方向性を探していきたい。

(2) 関係機関との連携

① 仙台市青少年対策六機関合同会議との連携

諸問題への対応に関係機関との連携は不可欠であり、顔の見える関係構築が重要である。今年度も教育相談課、適応指導センター、特別支援教育課、児童相談所、発達相談支援センター、子供相談支援センターの六機関と小中学校長会生徒指導部合同の研修会を計画した。仙台市精神保健福祉総合センター、県警少年サポートセンターさんから講師を招き、「はあとぽーと仙台の支援の

生徒指導部長 佐藤 信哉 (岩切小学校)

実際」,「SNSを介した性被害の実際と立ち直り支援活動」について講話をいただく予定であったが、当日、台風の接近に伴う各校の避難所対応等を考慮し、開催を急遽中止した。今年度、研修は実施できなかったが、今後も、連携強化を図るための情報交換等の機会を設けていきたい。

② 中学校長会生徒指導部との連携

1月に小中学校生徒指導部員が一堂に会し、それぞれの現状と課題についての情報交換・研究発表を実施する。小学校は(1)の調査研究を発表する。

(3) 復興七夕への参加

昨年度から現在の方式での七夕飾り製作となり、負担軽減が図られた。10年目まで現在のテーマ、製作方法を継続していくことが確認された。また、オープニングセレモニー参加校について、今年度から、校長会推薦となったため、小学校教育研究会音楽部会に推薦を依頼し、東六番丁小学校に参加いただいた。尽力いただいた音楽部会、参加校の皆様に変更して感謝申し上げたい。

震災を語り継ぐ視点から、10年日以降の取組、また、折り鶴に込める思いや願い、七夕飾り製作の意義を再度捉え直していくことも必要ではないかと考える。

3 次年度に向けて

震災に続き、中学生の自死、不登校児童生徒数の増加、体罰問題と仙台市の学校は大きな課題を抱えている状況にある。各校においても生徒指導上の課題や対応に苦慮する事案が増加していくことが懸念される。また、7月に公表された「(仮称)仙台市いじめ防止等に関する条例 骨子案」が来年度には条例として制定される見込みである。生徒指導部の取組が、各校における児童の健全育成、いじめ・不登校への対応の更なる一助となるよう、地区会における効果的な生徒指導研修など、内容の検討を含め、次年度の活動計画を立案していきたい。

終わりに、皆様の生徒指導部活動への御協力に改めて感謝申し上げ、今年度の活動の報告とさせていただきます。

新任校長所感

学校経営に寄せる思い



茂庭台小「三山」の下に

泉 裕行 (茂庭台小)

本校の校章には、旭光の三本柱と三つの三角形が描かれています。三本柱は「体・徳・知」の教育目標を、三角形は「太白山・蔵王・泉ヶ岳」を表しています。私自身は蔵王で生まれ育ち、泉ヶ岳を眺めて居住し、そして太白山を間近に見る学校へ着任しました。茂庭台小「三山」とのご縁を感じます。

これらの山々は、たくましく力強く堂々としており、麓にいる我々にとって目指すべき雄姿です。また、我々を温かく見守りながら、時には厳しさを与え、更なる成長を求める存在でもあります。

子供たちを包み込み、支える存在として、「学校・家庭・地域」があります。これらの「三者」協働により教育の地盤を固め、子供たちのよさを大切にしながらよりよい姿へ導き、地域ぐるみで育てていこうとする心意気が茂庭台地区には満ちています。

「三山」のように、堂々とそして温かく、かつ冷静な視線を持ちながら、茂庭台の子供たちの成長のために「三者」が協働できるよう、一層力を尽くす決意を新たにしています。

「明朗進取」の校訓のもとに

工藤 良幸 (大倉小学校)

校門に立つ石碑には、「明朗進取」という文字が深く刻まれています。「明朗進取」とは「明るく朗らかに、自ら進んでことをなすこと」を意味します。明治6年に開校した本校では、代々この校訓が教育活動の基盤となっており、私も講話等の中で、「どんな時でも笑顔と希望を持ち続けること」「自ら進んでいろいろなことに積極的に挑戦すること」の大切さを子供たちや教職員に語りかけています。

さて、大変歴史のある大倉小学校ですが、平成30年度は、一年生3人を迎えて、全校児童16名でのスタートとなりました。数の上では、確かに他校に劣るかもしれませんが、小規模校ならではの様々な取組を通して得た「一体感」「ふるさと大倉の自然や伝承文化に対する誇り」等は、どの学校にも引けを取らないと感じております。

学校の教育活動に大変協力的な保護者や地域の皆様とともに、諸先輩が受け継いできた思いや願いを大事にしながら、将来復興の担い手になる子供たちの持っている可能性を最大限引き出せるよう、日々の学校経営に取り組んでまいります。

しゃくなげの精神

古元 良和 (作並小学校)

昭和30年に制定された校章は、しゃくなげの花をバックに縦に「作小」とデザインされています。雪国の深山にあって、長く風雪に耐え、やがて美しい花が咲く『しゃくなげの精神』を象徴しています。着任早々に行った新川分校(平成24年度から休校中)への全校オリエンテーリングのとき、行く道々に薄紅色の美しい花が群生していたことを覚えていません。しゃくなげの花は、芽吹きを待ち望むここ作並の人々にとって、桜の開花以前に春の到来を実感し、人生観にも結びつくものなのでしょう。

温泉地、こけしの里、鎌倉山、清流新川、広瀬川源流、ほたるの里など、豊かな自然と豊かで温かい心の人々に抱かれた子供たち19名は、素直で明るく伸び伸びと生活しています。保護者や地域の方々は、作並を心から慈しむ人々です。体験的活動を多く取り入れたカリキュラムで、地域の方々の協力を得ながら全職員が一丸となり、大人になったとき、ここ作並が大好きだと心から誇りに思う子供たちに育てていくよう最善を尽くし努力してまいります。

子供たちに地域を思う心を

富山 英明 (愛子小学校)

小鳥のさえずり、虫の声、木々が風にそよぐ音、季節季節で様々な音を聞かせてくれる子供たちの学びの場「愛子こどもの森」が学校に隣接しています。今は、黄色やオレンジ色に色づいた葉の静かに落ちる音が聞こえています。

着任して半年が過ぎ、ようやく学校を取り巻く自然環境のすばらしさや史跡・名所といった歴史的資源の豊かさに目を向けられるようになってきました。

それと同時に、子供たちには、その豊かさやすばらしさに十分に触れさせたい、感じさせたい、そして大切に思ってもらいたい、そんな思いを強くしました。

この地域で生まれ育ったこと、愛子小学校で学んだこと、そしていろいろな人と出会ったことが心のよりどころになるように、また、将来何らかの形で地域に貢献したいという思いが持てるように、今後の教育活動を展開していきたいと決意を新たにしています。

温かな地域のつながりの中で

阿部 千幸 (住吉台小学校)

街路樹が色づきはじめ、泉ヶ岳からの爽やかな風を感じる朝、「6年生に、明日の陸上記録会で思いっきり頑張っておいでねって、声を掛けたよ」と、防犯巡視員さんがにこにこしながら教えてくれました。毎朝、子供たちに温かな声を掛けながら見守ってくださっているのです。

夏にきれいな羽を広げて舞う国蝶オオムラサキは、子供たちが中庭のオオムラサキハウスで飼育しています。地域のオオムラサキ会の皆さんが常にサポートしてくださっているおかげでもう25年以上続いているのです。

子供たちは、保護者や地域の方々に温かな愛情を注がれて、素直に明るく育っています。歴代の校長が職員と築いてきた「人と人との温かなつながり」を本校の伝統として、これからも地域の良さを取り入れた教育活動を展開したいと思います。そして、子供たちが、地域を大事にし、未来に夢を持って主体的に考え行動できるように、職員とともに学校経営に取り組んでいきたいと思っています。

日日是好日

船山 雅和 (高森東小学校)

「日日是好日」は、大倉小学校に勤務していた頃、地域の有名なお寺の住職から色紙に書いていただいた言葉です。毎日がよい日である、という意味ですが、これにはとても深い意味があり大切にしています。

高森東小の子供たちにとって、職員たちと学校で過ごす毎日はかけがえのない一日です。校長として、子供たちが「学校が楽しい」と思える学校経営を行うことが重要であるとストレートに思います。教師として授業のことを考えていた時とは全く別のことに時間を費やし、地域や保護者との信頼関係を大切にして共に高森東の児童の健全育生に頑張っています。そして、毎日を大切にしています。

新任校長として、1学期が何とか終了して後半に入りました。職員を見ていると毎日が余裕なく忙しくしています。紛れもなく職員一人一人の頑張り、児童の変容につながっていることに感謝し大いに認めています。教職員一人一人が成長して、チーム高森東がたくましくなっているその情報を地域や保護者に発信していきたいと思います。職員の頑張り、必ずや達成感となって返ると信じています。

ここに学校があることの喜びをかみ締めて

片岡 有吾 (西山小学校)

教頭時代、2校の閉校に携わる仕事をさせていただきました。1回目は中学校でした。閉校行事はもちろんのこと、閉校記念誌や引越しの計画など、精一杯取り組みました。十分とはいえないまでも責任を果たした達成感がありました。しかし、時がたつにつれ、母校を「失った」生徒、地域の方々のことをふと思えば、心が痛みました。

2度目は、小学校。震災に係る閉校でした。幸いにも統合後の新設校で引き続き仕事をいただきました。「産みの苦しみ」と同時に、教職員・子供たちが一丸となって学校を「一」から作ることの楽しさを味わいました。そして、これこそが教師の仕事の醍醐味であることに改めて気付かされました。

本校の初代校長は、私が新任の時、女川で御指導いただいた方です。西山小に着任したのにも、何か縁を感じます。まだ開校から30年足らずの新しい学校です。今ここで仕事ができることの喜びをかみ締めています。40名近い教職員の皆さんと共に力を合わせ、しっかりと歴史を刻んでまいり所存です。

地域とともに「みどり晴れやかに」

鹿野 征美 (桂小学校)

桂小学校の校歌「みどり晴れやかに」は、子供たちが未来に向かって明るく晴れやかに進んでいく姿が歌われています。校歌は学校や地域の方々の心の歌と聞いたことがあります。

開校して24年目を迎える本校では、卒業生ではない地域の方々や保護者の方々が多のですが、毎日のようにボランティアとして学校に来ていただき、協力をいただいています。学校や子供たちのつながりを大切にし、温かさが感じられる地域です。

まもなく卒業生が多くの保護者となり地域ボランティアとなり、学校や地域を支える時がきます。さらに校歌が地域の方々の心の歌として歌われることと思います。

このことを考えると、諸先輩方がこれまで築き上げてきた指導のたまものであり、保護者や地域の

方々が支えてくださったお陰と感謝しています。多くの支えていただいている方々に日々感謝し、子供たちが将来にわたって地域を愛し、大切にすることができるように、学校経営に努めてきたいと思ひます。

笑顔あふれる鶴が丘を目指して

鎌田 孝悦 (鶴が丘小学校)

鶴が丘小は、「県民の森」を背に、遠く蔵王連峰を望むことができる自然環境に恵まれた学校です。この環境の中、全校たてわり遠足を実施し、学校から「県民の森」までグループごとに歩きます。上学年の児童と下学年の児童がペアとなり下学年の児童の歩く速さに合わせて一緒に歩き、県民の森アスレチックでも声を掛けながらチャレンジしていました。昼食時も楽しそうに話をしながら食べ思い出に残る一日となり、互いに普段の生活とは違った発見があったと思ひます。この行事も人とのかかわりを通して思いやりの心を育てることにつながっています。

毎朝、通学路を歩いていると元気に挨拶をする子供たちに会い、地域の方からも「挨拶が立派です。」とお褒めの言葉もいただいています。また、登下校の見守りや読み聞かせ、行事の支援などボランティアの方々の協力もいただいています。今後も人とのかかわりを大切に笑顔あふれる楽しい学校・地域づくりに努めていきたいと考えています。

感謝しながら前進

飯野 正義 (沖野小学校)

「教頭先生、おはようございます。…あっ、校長先生だった。」子供たちのかわいらしい間違ひは夏休みが明けてもまだ少しだけ続きました。

6月に現任校の教頭から校長に昇任させていただきました。当初は現任校で立場が変わることに戸惑ひもありましたが、今は本当にありがたいと感じて

います。昨年度に教職員や保護者の皆様と話してきた課題の改善を少しずつですが取り組んでいるところです。児童についての報告を聞くときも、すぐに顔や様子が思い浮かびます。校長室にいて重責を実感するとき、顔を上げるとお仕えした二人の校長先生の写真があり、見守られ励まされている気持ちになれることも大変幸せです。

前校長、地域の皆様に着任の御挨拶に伺ったところ「安心しました。」「頑張ってください。」とのお言葉を頂き、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

温かな沖野の地域に根ざし、純粋で人懐っこい沖野っ子らしさを伸ばし、より一層地域と保護者から信頼される学校づくりに努めることがなよりの恩返しと思ひ、微力ながら学校経営に努めています。

地域（で・と・に・を）学ぶ

佐々木 賢哉 (四郎丸小学校)

四郎丸小学校は、海岸から約5km、名取川から約500mに位置しています。震災当時、直線距離にして校舎から約1kmのところまで津波が押し寄せ、あと数10cmで名取川の土手から水があふれるところでした。4年後に、新しい校舎が完成します。震災時の「炊き出し」の拠点となった中庭、閑上の方がぶ濡れの状態で避難してきて過ごした教室などが、形としては消えていきます。そのような当時の様子を知る職員も今年度は誰もいません。教職員も子供たちと共に「知って 学んで 伝えて」いかなければならないと強く感じております。

今、4年生は総合的な学習の時間に地域の方が震災時の「備え」として取り組んでいる「みそ作り」、震災を機に「地域の皆さんを元気にしたい」と誕生した「かにっこ和太鼓」を学んでいます。

四郎丸小学校として忘れてはいけないことを「いのちの大切さ」とともに、次に伝えていくことも学校としての大切な役目であると考えながら学校教育を推進していきたいと思ひます。

編集後記

仙台市の第2期教育振興計画に示されている「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」の育成を目指して2年目を迎えました。今まさに新しい時代に向け、仙台市の施策「仙台カラー」の実現に向けた学校教育が求められています。

一方、震災から7年が経過し、子供たちの体験や記憶の風化を防止することも重要な時期を迎えています。そこで、本号座談会では「震災時の教訓を風化させないための取組」と題し、岩田教育指導課長はじめ、被災地支援にいかれた新妻教職員課管理主事、そして被災校校長先生方に御出席いただき、それぞれの立場から風化させないためのお考えについて対談していただきました。今後の学校経営の一助になれば幸いです。

最後に、平成最終号となる「廣瀬川」第95号の発刊に当たり、御多用の中、快く寄稿いただいた校長先生方に厚く御礼申し上げますとともに、会員の皆様のますますの御活躍を祈念いたします。

(95号担当チーフ 三浦 記)

編集担当者：三浦敏光（向山小） 滝川真智子（柳生小） 古元良和（作並小） 飯野正義（沖野小）

